

第7章 調査研究

演題名:豚胃の壁深層性限局性好酸球浸潤症 -Circumscribed Eosinophil Infiltration in the Profundomural Regions of the Swine Stomach-

発表者名:福山博康、○結城恵美
発表者所属:八雲食肉衛生検査所

1 はじめに

同一系列の複数養豚場より搬入される6ヶ月齢肥育豚において、胃に下記肉眼病変を有する症例が散発した。

2 材料及び方法

平成19年1月から12月に搬入された14病例(8養豚場)より、全例の胃、3例の腹膜(大網等)に観察された3~10mm大、扁平楕円形の白色結節及び5例のリンパ節(胃リンパ節5例、脾リンパ節3例及び肝門リンパ節3例)を材料とした。

これらのリンパ節には腫大、硬化、断面の微少灰黄色病巣のいずれかが観察された。

材料は10%ホルマリン固定後、H・E染色、PAS反応、Lunaの好酸球染色を施した。

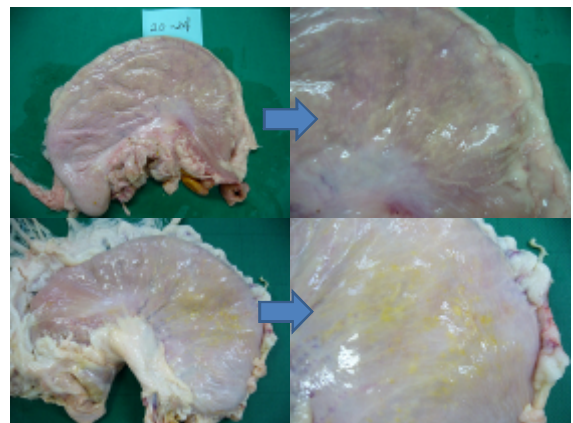
3 結果

(1) 胃の肉眼所見

胃漿膜下に透視される径1~3mm大の灰黄色病巣が散発ないし密発していた。

病巣は大彎側の中央部に好発しており、時に癒合し線状~斑状を呈しており、周囲よりやや硬く限界は不明瞭であった。

胃壁は水腫性に肥厚しており、粘膜に異常は無かった(図1)。



<図1:豚胃肉眼所見>

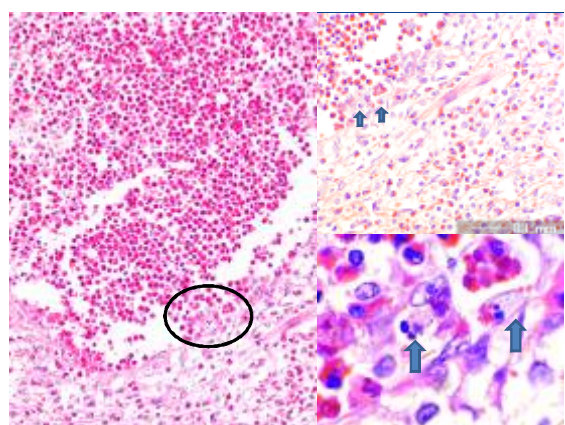
(2) 主な組織所見

1) 胃

粘膜筋板より漿膜にかけての大量の好酸球とマクロファージの浸潤、水腫、繊維性結合組織の増殖がみられた。粘膜筋板を除く粘膜に変化は無かった。

好酸球は超密集巣を形成し(図2)、中心部のものは時に壊死していた。好酸球の細胞質に孢子虫類の孢子と思われるもの(孢子様物)を単~複数担うものが散見(超密集巣で多い)された(図3)。

マクロファージは屢々好酸球超密集巣の周囲に集簇し、好酸球及び赤血球を貪



<図2:豚胃好酸球密集巣(←孢子様物) HE染色>

食しており、有糸分裂、多核巨細胞化が認められた。好酸球と同様に、孢子様物を細胞質に担うものが散見された。これらは類円形で大きさ4~2 μ m以下で、好中性或いは弱好酸性で、変性し橙黄色に染まり、PAS陽性を示した。

2) 腹膜の病変

石灰化が認められ、多核巨細胞浸潤を伴う好酸球密集巣を形成していた。

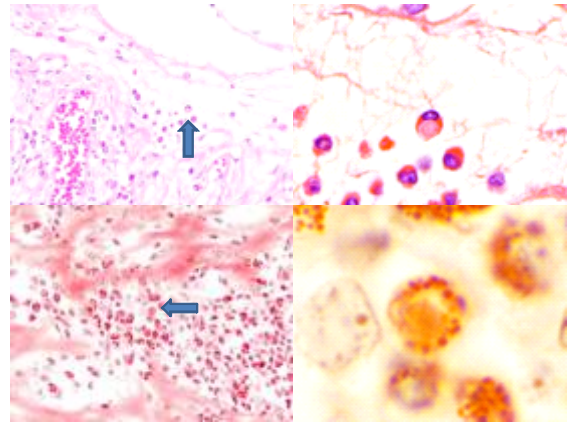
1例で多核巨細胞の細胞質に孢子様物を観察した。

3) リンパ節

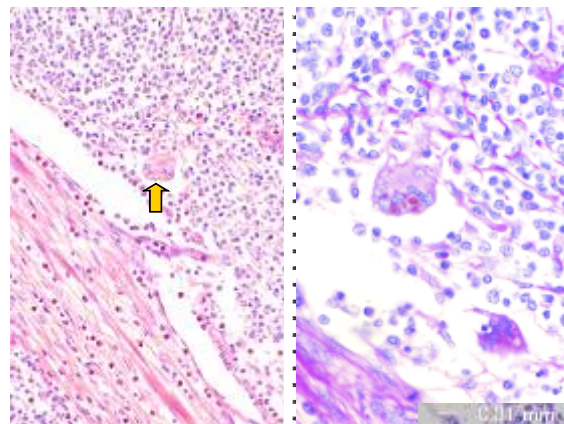
リンパ洞における好酸球、マクロファージの浸潤、水腫、繊維性結合組織の増殖が認められた。被膜及び小柱への好酸球浸潤及び繊維性結合組織の増殖が認められた。

マクロファージは屢々多核巨細胞化を呈し、時に好酸球を貪食していた。

好酸球及び多核巨細胞の細胞質に、胃と同様の孢子様物を観察した(図4)。このものは病変波及のない部位や、その部の細網細においても観察されることがあった。



<図3:豚 胃 好酸球内に認められた孢子様物
上段HE染色 下段Lunaの好酸球染色>



<図4:豚 脾リンパ節 リンパ洞内の多核巨細胞内の孢子様物 左:HE染色 右:PAS染色>

4 考察

胃病変を「豚胃の壁深層性限局性好酸球浸潤症」と診断したい。

本症はリンパ節等を含め、全例に散見された「孢子虫類の孢子と思われるもの」の存在と密接な関係にあるものと考えたい。豚においては好酸球も感染細胞のひとつであるのかもしれない。

Dubeyらは犬(1975)、猫(1972)の数種のイソスポラ属のExtraintestinal Stagesの場として腸間膜リンパ節、肝、脾等をあげている。猫ではスポロゾイト類似の寄生体が単体で、時に分裂し最大で15となったものが感染細胞内に観察されることがあると述べている。また、その感染細胞をマクロファージと推定している。